



Title	『ジャーナリズム入門-パリ日記-』 フランツ・ヘッセル
Author(s)	園田, 尚弘
Citation	長崎大学教養部紀要. 人文科学篇. 1994, 34(2), p.135-146
Issue Date	1994-01-31
URL	http://hdl.handle.net/10069/15335
Right	

This document is downloaded at: 2019-04-26T10:03:45Z

『ジャーナリズム入門ーパリ日記ー』

フランツ・ヘッセル

園 田 尚 弘 訳

私は数日前からここにいる。本当にここ、パリにいるのだ。パリ到着の不安と喜びはまだ消え去っていない。眠りに入りながら、私はときどきケルンの小路を、線路の盛土の下に見る。汽車はなかなかそこを出てゆこうとしなかった。ー汽車は長く停車しバックし、再び停まったー。ベルギーの溶鉱炉の光と、その光が外国の民衆の顔と荷物を照らしている反射のあいだで、私は眠りから覚める。この人たちは、夜、十二時と四時のあいだに、ひとつの街から次の街へと旅行し、低い流れるような、ねぼけたフランス語を話している。とうとう明け方に、イル・ド・フランスの川霧の上で、私は眠りにつくのである。フランスの島という名前のこの土地が、その灌木の森とともに、雄々しい風景から、息づく大空の下で膝を曲げてうずくまった川岸から目を覚ますときに、うとうととまどろむのはいい気持ちである。列車がすべりこむ前に私は目をさましている。もともと私は到着しないのだ。

最初の日々のことをいま考えようとすると、過ぎさった時間と通りすぎた道路が次々に浮かんでくる。すべてが無秩序に、あるいは動揺する秩序のうちにつみ重ねられ、バラバラにされている。そうしたかたちで、古い旅行書の第一頁には、街の記念碑が、一枚の地図のうえにまとめられているものだ。私が到着したときに私の旅行カバンを受けとったポーターの鼻からひげにかけて刻まれたしわは、今では、私が昨日見た教会のまるい灰色の壁のなかの裂け目として刻まれている。私がかれを見たとき、そのしわは品が良いとはいえなかった。本来ならば、古くからの知人みたいに挨拶し、手近かの飲み屋のテーブルに行って、鉛のお盆のうえの一杯の白ワインを飲み、最初に出会ったこの男と、戦争中はどんなだったか、この男と男の息子はどうしていたのかを注意深く問いかけながら、いやな期間を追い払ったことだろう。彼の顔は上品でなかった。彼のひげは、微笑をさそう高貴な顔だちのモンマルトルのシャンソン歌手を思いおこさせた。このような顔は描写できないものだ。というのもその顔はすでに描写されているとおりに見えるからだ。ーところで私はこのシャンソン歌手の店の前を通り過ぎた。私は店の中に入ることをしなかった。ーしかしポーターの顔のしわはもっと深かった。私はその顔に一言も話しかけることができなかった。そのときと同じよ

うに、それ以来出会ったときにたいへん親しみをおぼえ、しかも近づき難く感じた他の人たちにも、私はほとんど話しかけることができなかった。

※

私は目的をもたずにここにいるわけではないことを、ときどき思いおこすようにつとめねばならない。私の兄弟たちは私に一種ジャーナリスティックな仕事を与え、推薦状ももたせてくれた。私は昔の知人や友人のアドレスをもっているから、かれらを訪ねることができるだろう。私は誰ひとりとして訪問しなかったし、新聞のために書くということも全くしなかった。私は家の中に入るのに奇妙なためらいを感じる。街路やテラス、バーにいるのが私はいちばん好きだ。今では、私は当時よりも、もっとここに不案内である。

私は好んで土地に不案内であろうとしているのか。見るものすべてにおいて客であろうとしているのか。しかし私は違和感を抱いているわけではない。そういうことはないのだ。最初のコーヒー代を求めてきた亜鉛のお盆の上のボーイの湿った手は、私には既に馴染みのものだった。午後、冷えた家の入口に腰を下ろし、縫いものをしてる守衛のおかみさんたちについて言えば、私は自分の乳母に見られているような感じがする。そこはかたない暖かさが、私の感覚と出会うすべてのものと、私を一体にする。大気にただようしめり気は、幸福が感染のようになかだちをしてくれる。最初の晩、私は郊外の道路で、メトロの入口のそばで、ひとびとがひとりの男をとりまいているのを見た。その男はワイシャツ姿で最新の歌を歌っていた。手回しオルガンの伴奏つきだった。子供がひとり、歌詞を書いた紙を、まわりにいる人たちに売ってまわっていた。以前と同じように、口を開いて、小声で一緒に歌をくちずさむ南の娼婦たちがそこにいた。私はこの街の言葉を彼女たちのあとについて復唱し、その音を真似して学んだのだった。彼女たちはこの街の言葉に惚れこんでいる。当時は、アナタハ、クチヲヒラキサエスレバイイという頼もしい歌が流行っていた。それから長い時がたっている。そこにいるのは同じ娘たちだ。彼女たちが歌詞のついた紙を覗いて、新しい歌をためしに歌っているときの、彼女たちの肘が、私は好きだ。でも私にもっと近いのは、帽子をかぶり、タイツをはいた、生氣のない、しっかりした顔立ちをして、口笛を吹くために口をとんがらせている若者たちだ。この一群から街路の向こう側に目を移すと、私にはアスファルトもホテルの入口の赤いカーテンも、そのうえにあるバルコニーの棚も、年の市の屋台のキャンディも、太いピラミッド型のキャンディも、みんな、この近くにいる人々の体と同じ溶けやすい塊でできているように思われる。私自身がこのまわりの世界と一致し、幸福を、絶対的幸福をこの周囲と共有しているのだ。

当時であればこうは言わなかったであろう。もしそう言ったとすれば、私は甘美な

死を喜こんで受け入れたらう。当時であれば、私は、いまときどき驚きながら発する問い、「自分はここで何をしているのだろうか」、「自分は何を探さねばならないのか」という問いをけって自分になげかけなかったらう。私はテーマと課題をもっている。「印象」を私は「確保」しなければならない。私はいわば模範的に体験するように言われているのだ。

しかし二、三日は、私はそのことを忘れたいし、それが許されてもいる。私はショーウィンドーや、屋台や、市がある街路をあてもなく歩きまわることができる。私は、街路の人間だ。私は通行人だ。だから通りすがりに、蓄音機のある店に簡単に入ることができる。ドアは常に開かれている。どの器械からであれ、聞くものがつかまえる音楽からは、少しばかりの音の余りが、街路に、そして私に迫ってくるのだ。すぐに私は敷居のうえにいる。すぐに私は、レジのところでその店のコインを手に入れる。そして他の人たちの歌が、私のまわりでズズウいつてるときに、私は自分のコインを投入口に投げ入れる。小さな数字板の上で、私は知っている歌を探し出したのだ。上で赤い小さいランプがつき、私は受信機を耳にもっていく。下方の、私が肘をおいているガラスには数字板が逆に写っているのが見える。私の歌が語っているのは、パリの橋の下に溺れた光り。それは戦争のすぐ前に歌われていたし、戦争中にもしばらく歌われていた。捕虜が、休暇兵が歌っていた。その歌は、まだすたれていなかったのだ。

※

モンパルナス大通りのカフェやカフェテラスが「われらの時代」のようではなくなったということは、すでにひとから伝え 聞いていた。それはそれ自体不思議ではない。私がこの簡単な事実を自分で引きうけることができないということだけがいやなのだ。「ドーム」のそばを通るごとに、私は当時の私たちのテーブルを捜すが、そのテーブルは今はない。テラスにはひとがあふれている。そこにいる見知らぬ人たちの一団をみて、特にイライラするのは、多くのひとたちが「たいへん似ている」ように見えることだ。この顔、あの顔を私は知っているように思う。私はいかに私だと認められてしまうように思う。私はそこに腰を下ろすことができない。私はラスパイユ通りを南に上ってゆく。舗道の横の砂のうえに来るやいなや—そこをこの大通りのなかでも郊外のような感じの部分が庭の垣根に沿って走っている—これの向かいには、私が以前、数年間住んでいた交差する通りが開いている—私にとっては時間が混乱してしまう。ちょうど私たちが夢で知っているように。それらの夢のなかでは、私たちは人生のさまざまに異なった時期を同時に、乱雑に目前にする。後の時期の女友達の庭から、未だ若い母親のベッドに近寄り、子供部屋から兵舎へとよろめいてゆく。映画館で、

スクリーンに、人物のいない風景や路が写るとき、あるいは場面と場面の合間で、私たちは同様なことを体験するものである。しかしそれが私にとっては、いま、白昼、ここで起るのである。私が田舎に来るときはいつも、私のなかの何か、「これらすべてが」まったく存在しなかったことを、一度も起こらなかつたことを望んでいる。そして私が砂から再び舗道の上に来ると、そのとき—そのとき私は世界戦争に責任がある。私はこれを別様に表現することができない。

夜、ホテルに着くと、一通の手紙が渡された。私にとってそれは、守衛や、家や街に対して、私が私であることの気持ちのよい証明であった。それはけっしておもしろい手紙ではなかつた。「パリではどこに住んだらよいのか、ホテルを推薦してくれ」とそれほど親しくない知人が私にたずねてきているのだった。私が住んでいるホテルを私は彼に推薦しないだろう。というのもこのホテルは辺鄙すぎると思うからだ。私にとってはそのほうがよいのだが。私は住むために絵のように華やかな街区を捜しださなかつた。パンテオンとソルボンヌのあいだの小路も、モンマルトルの丘も、セーヌ河畔の古い地区、小さな島の上の古い地区をも求めはしなかつた。私のホテルは、郊外電車の土手の向かいの長い、あまりひとけのない大通りのはじまりにある。次の角を曲がると、賑やかなモンルージュに達する。私の部屋は色彩に富んでいて、しかも色があせている。そのなかでベッドが一番大きな部分を占めている。これから私はその知人のために他のホテルを見るだろう。それによって、私はここで再び家々のなかに入ることを徐々に学ぶことになるのだ。私が図書館に入ることになれば、私はぜひパリのドアについて何ほどか学んでみたい。堂々としたドアがいつも私の注意をひく—それらのドアはきっと五十年とか七十年とかはたっていない。誰かがそれらのドアを開くときには、木の表面全体が区切ってある四角形のひとつだけをあけることになる。ドアを開く人は、下に枠として置いてある高い木の敷居を越えなければならない。私のホテルのすぐ近くに、そのようなドアがある。通り過ぎるときには、私はいつもそれを見なければならない。今朝早く、そのドア全体が黒い布に覆われて見えなくなっていた。葬儀屋のこの布によって、ドアは死の聖めを受けていた。黒い布がめくられ、ひとりの男が黒いマントをはおって葬式の列の先導者となって出てきた。その男は後につづく喪に服する人たちの動きと感情を指示していた。この男の上っ張り、神々のマントであり、同時にカーニバルのドミノ服だった。私は彼についてゆきたかつた。

※

知人のために部屋を探すという口実のもとに私はあちこち走りまわり、いろいろのホテルをみた。ホテルというこの言葉は、ドイツ人の耳には、非常事態や緊急の滞在

を表わす外国語の響きをもっている。ホテル、それはくつろげない家であり、そこでは見知らぬ人々に責めたてられ、世話をうけて、旅の時を終えるのである。君の部屋は、君のものというより、その部屋を片づけるひとのものである。朝食はボーイにたいする義務であり、入口と出口を管理するのは守衛である。パリにはホテルでないホテルが数えきれないほどある。きみがきみの人生においてそうであるように、まっとうに生活できるホテルの部屋がある。きみはそこで不愉快に思われずに死ぬことだってできる。きみは二・三度そのような部屋で眠りこみ、目覚めたときには、どうしてかは知らずに、ある街路の、ある街区の住人になっているだろう。きみはベッドと窓のあいだでまったくひとりであることができる。しかし街はきみの部屋のなかにある。きみはひょっとしたら、きみの部屋から、多彩な雲の壁の前に何本かの細い角のある煙突が立っているのだけ見るかもしれない。しかしその煙突のなかに、古いフランスの城にあるすべての角燈の建築上の構成が隠されているのだ。屋根はみんな、小さなルーブル宮である。きみの戸棚のそばの鏡や、暖炉の上の鏡の硝子のなかに、鏡の多いこの街のすべての輝きがある。まさに世界というにふさわしい。無数の遠くの音が、きみのまわりに、静寂をつみあげる。船室のなかにいるように、きみは大海のまんなかで安全に泳いでいるのだ。

しかし、大きな街のどの部分に部屋をとって夜と昼を過ごすべきか助言を求めている土地に不案内な知人に対して、いま、私はどんな助言をなすべきか。どこというのは、もともとどうでもよいことだ。家や、街路や、十字路がひとに知られていなければいけないほど、きみはそれだけパリにいることになるのだ。パリ、それは、無数の窓の前の格子つきの狭いバルコニーであり、無数のタバコ店の前の赤いブリキの葉巻きであり、小さいバーの錫のプレートであり、門番の女の猫である。だからどこかにすむことはできるのだ。しかしまた、ひとはいたるところに住みたがるものだし、街のあらゆる区域の眠りと目覚めをともに体験したがるものだ。きみがあてもなく長い時間、街をうろつきまわったときには、きみはちょうど疲れをおぼえたところで、たとえば喧騒のさなかで、木の繁った静かな公園をとりまいているあの場所なんかで眠りたいと思うだろう。そこではホテルの窓からうすみどりの梢と子供たちの遊び場にある見捨てられた砂の山がみられるだろう。あるいは全体が石でできていて、柱や立像や泉のまわりで円や四角形や八角形を描いている場所で眠りたいと思うだろう。その場所は、柱や像や泉を中心点にしていて、そこに通じている通りから、人ごみに方向を換えられ、その日の名残りとして一晩中舗道のうえで、低くよくひびく音をたてながら舞いつづけるダンスに呑みこまれて、そこにひとびとがおし寄せてくるのだ。

眠りへと誘う場所は脇道にある。それらの道は、たくさんのブルヴァールや大通りから、たいいてい、少しばかり上り坂になって分かれていて、優雅な区域から小さな

街へ、近代から、隣りあっている中世へと移行している。そこでならきみは、きみの部屋から華美と貧窮を、現在と歴史とを同時に身をもって生きることができるだろう。

研究所や図書館のごく近くで早々と寝にゆきたい通りがある。そして、その舗道から夜遅くなっても、離れたくない通りがある。そこでは街角のカフェのテラスにすわる幸福から、そして人生を未知のものを通過と感ずる楽しさから離れられないのだ。

アーチの下の広い出口と、その背後のホールとエレベーターは魅力に富んでいる。ひょっとすると古風で高い木のドアと、そのなかの鑄鉄の手すりがついた狭い螺旋階段は、もっと魅惑的かもしれない。そしてまったく異なったたぐいの誘惑は、各々の階に二つ、いやときどきはたったひとつだけの窓しかもたないみすぼらしい家の、踏みならされた石の階段からやってくる。そしてそこにある窓は、どれもひとつの秘密なのである。

しばしばモンマルトル墓地の上において、墓石のうえの霧と、霧のなかに、街のすべての聖堂を見たいと思う。あるいはもっと遠くの「ビュット」に登りたいとおもう。そこではホテルの階段は、ほのかな光の方へと降りてゆくたくさん階段の第一番目の段であるか、向うのサクレ・クール寺院の真白な明るさにむかう第一段目なのである。ときおり、河岸や橋のアーチや、その下に漂っているもの、つなぎとめられているものとともに河が日毎、親しいものとなり、ときおりは、雨にぬれた公園の格子や教会の壁のしめった灰色が日毎の隣人になるのである。

あるいは大きなデパートの附属の建物の後ろの壁がそうなることだってある。きみが、孤立したシテのホテルで窓に近づくなら、きみは、門道からお針子たちがやってきて、二人、あるいは三人づれで昼休みの散歩に出かけているのを眺めることができるのだ。靴屋のところで何人かが立ちどまり、他の娘たちは、おしゃべりをしながらあるきつづける。きみはデパートの何かの売場で働く若い男ではないか。きみもまた昼休みをとろうとしているのではないか。そしてきみの女性の同僚が小さな皿の少量の食事をかわいらしくつついている食堂にゆくのではないか。私は他ならぬきみのために、そのような窓べに、長いあいだ立っていたのだ。でも私はきみのために、本当にパリらしい部屋を探さねばという責任感をおぼえている。私はホテルの反対側のかなり大きい部屋のこともたずねてみた。それらの部屋には、ルネサンスの騎士と婦人と鉾槍と糸巻棒を描いたステンドグラスが窓にはめてある。しかしそれらの部屋は日割でのみ貸されているのだ。

ひょっとしたら、きみは、この一角にはあまりに現代的にすぎるかもしれない。きみはエレガントな遊民でありたいと思うかもしれない。そうだったら、足をひきずって歩く女家主の朝用の部屋着のような派手な壁紙の部屋を薦めるのは適当でない。きみは壁に金の板張りをのぞみ、きみの窓から、自動車のラックニスに宝石店の光が映っ

ているのを見たいと思っている。きみが最近のもの、新しいものを望んでいるなら、開通したブルヴァールの新しい部分にきみのために一軒の家を用意している。そこできみは、まだ人のいない商店のうえに住み、きわめて荒々しい混沌状態を眺め、成長する都会の巨大な骨組みとプラカード、ほこりっぽい四角い切石を見るだろう。

そうじゃないって。きみは若い労働者のような生活がしたいのか。それなら、きみのために、ラ・ロケットから遠くないところに、あるホテルを知っている。そのホテルの階下には、きみが仕事を終えたあとで、楽しい時を過ごせるダンスホールがある。刺しゅうをした灰色のカーテンをつけたきみの窓のところには鳥かごがある。きみの家主は色彩豊かに装った黒人と白人の混血である。その女は赤いチュニジアの靴をはいて歩く。ここでは、きみは響きのよいアドレスさえもつことになるだろう。なぜなら、きみのホテルは一パリの他の多くのホテルのように一オテル・ド・ラ・ペという名前だからである。

知人は、私が書いたことでは、なにもはじめることができないだろう。結局のところ、それはパリに住むということについての正直な新聞記事のための草案ということになるだろう。しかしひとは私が言いたいことを理解してくれるだろうか。

※

それでも一回、ひとを訪問した。私の兄のトーマスがスタンダール、バルザック、ロマン派について文通をしている学者のところへ行った。彼のところへゆこうと決心するまで幾度も眺めたアドレスは、サン・ジェルマン大通りがセヌ河へと続いている通りのうちのひとつの通りで、その一番地であろう。

私は本や骨董品の陳列に沿って歩いた。いくども私は立ち止まった。道路からショーウィンドーをのぞき、ショーウィンドーから通りのほうを振り返った。それによって、ついに、ガラスの壁が時代を交代させることになり、私のそばでガラス板のなかを眺めていた若い労働者が民族衣装の絵になり、絵草子のなかのあの「沖仲仕」が同時代者になり、次の店で古い流行の銅版画に一心に見入っていた若い女が、ロマンティックな「牝獅子」に生の息吹を与えることになってしまった。

一番地の家は川へ向って、最後の家にちがいがなかった。しかし路はカーヴしていた。それから宮殿の門道が広げた。私は研究所群の側翼のドアのうえに一番という番号を見つけた。それでは、私が入ることになっていたのは個人の家ではなかったのだ。勇気がでてきた。木の手すりのついた広い上り階段が、窓の張り出しのそばを曲がっていた。これが河岸と、河と、暮れなずむかなたのループルに、威厳のある枠を与えていた。

それから私はノートと本をつみあげた机の前にいた。高い書架を背にし、よい位置

をしめて、私は四、五人の年輩の男たちのなかにいた。彼らは壮大なバルザック談をやっていた。私は時たまその話のなかに入って質問することが許された。そこでは判断されたり、比較されたりはしなかった。彼らは、苦しみと喜びをもたらす家族の一員について話すようにバルザックについて話した。バルザックが投宿した旅館の名があげられた。バルザックがその前に誰と会い、後で誰に手紙を書き、田舎のどの家がこの物語に場所を提供し、古いパリのどの路がああ描写にきっかけを与えたのか、そしてバルザック、この頑固者が、何をとり違え、あるいは何を变えたのか、こうしたことをここにいるひとたちは知っていた。ソファにすわった活発な白髪のはげしい男は、最近ブルターニュに行き、男爵で将軍の後裔の家にいっていた。その家で若きバルザックは『みみずく党』を書いたのだった。

ひじかけ椅子にすわっていた真直ぐ背をのぼしたひとを、他の人たちは、戯れに大統領と呼んでいたが、彼は、絶対を探求した錬金術師が住んでいた北の街からの家族名と通りの名を報せた。印刷物が、たった今到着した手紙のように回された。世間の噂さに反対する親族間での話のように、ハンスカ夫人の夫への貞節について話がかわされた。

家の主人が家を出てゆくひとたちを連れて、古い階段を降りたとき、私は彼の手に、空いた左手に、一右手は手すりに触れていた一音のする閉じた角燈を想像した。門のアーチの下で、彼は私の物知りの兄についてたずねた。それによって私は現在にひき戻された。しかし次の橋まで、私と並んで河岸をしばらく歩いた小柄な老人は、彼の専門領域での古い時代の思い出について語った。彼は、ドイツからの客としての私に、ハイデルベルクとシュトゥットガルトについて話をした。彼はその地の音楽クラブに暖かく迎えられたのだった。彼はまるで、シューマンが私の父の親友で、彼の知人であるかのように、シューマンという名前を言った。

それから私はひとりになった。しばらくのあいだ閉店した古本屋の屋台のそばに立って河を眺めた。老人は二、三行のシューマンの詩をそれとなく歌っていた。歌詞は彼の口のなかで、外国風の美しさをもっていた。「多くの声が地下で第二のものに歌いかけ、嘘をついた。」

私は数時間もパリの谷や丘を歩きまわらねばならなかった。そのあいだに、時間の混乱と木の階段、バルザックをめぐる老人たち、私の孤独といったものから、うまい具合に、新聞記事をひとつものすることはできないかという考えが、チラッと、こざかしく浮かんだ。しかしその考えから私はすぐ逃げだした。私は突然ムフタル通りのあたりの地区にいた。私は最近、魔女のような女たちが掃除をしていた横町のむきだしのストーン・コーナーのところきた。衝突よけの縁石として置かれ、以前の建築物の残りであるこの石は、見捨てられた祭壇のようであった。「男神へなのか、女

神へなのか」と私は考えた。それは未知の神に対する古い幽暗な祈りの文句であった。ひとが聖なる土地の砂をとるように、私はこの都市の石を砕いて取りたかった。私は何とおかしな外国人だろう。私は再び上り下りして、忘れられた河の上の死んだ小路へ、かつての王立織物工場、レ・ゴブランー固有名詞に由来し、つきせぬ内容をもつことになった単語ーの反りの入った後壁の前の小路に行くことになっていた。いや、私はあまりに孤独な小路にゆきたくはなかった。私は街の中心部にとって返した。私はバスチーユで、イタリア人らしい労働者にまじってアペリチーフを飲み、バーの前にいる娘たちのグループの薄い、にせのハート型の唇を見たが、そこから、私はフォーブル・サントワンティヌの広い通りにやってきた。それからナション広場の前の小さなレストランで食事をし、ピッコロという名前のレンガ色のワインを飲んだ。そのワインは砕かれた小石の味が、溶けていく岩の味がする。そのワインは渴きを大いに静めてくれる。それから私の進行方向の右と左にある無名の、ほんのわずかの家々が興奮を呼びおこす運命的なものとなった。明かるい窓や、暗い窓の後ろで生じているのは、それだけではなかった。以前のすべてのものが、うす暗やみのなかで、暗くなりながら、つみ重なりながらつけ加わったのだ。それは壁ぎわの棚や暖炉の敷居から漂いつつ、なかをのぞきこもうとしているものはっきりしない像とともに、鏡から流れ出ていた。それはすき間なく、びっしりと、絶えまなく私のところに降りてきたのだ。なにひとつ中断することがなく、過去が、永遠の日常が、持続する夕べがともに生きている他ならぬこの街で。私は母なる街にいた。私は足下の舗石によって荷われ、ベッドへと運ばれていた。夜遅くなって私は、バルベとロシュアルという言葉の間にアーチを作っているメトロの橋の向かいのカフェにいた。そこはモンマルトルの縁にあって、ラ・シャペルの影が伸びている。それから、下り路では、細かい雨の下でアスファルトからーはっきりと、ずっと以前の二人の女との若き日のアヴァンチュールの思い出がよみかえってきた。二人というのは筋肉質の女と果肉のような女で、二人は私の横と上で、天井画の雲にのった女神たちみたいにクッションに横になり、私がそこにいないかのように、私を無視して、彼女たちの情事について語り合い、ねとぼけた手で私のことを再び思いだすのだった。その思い出のために、私は少し道に迷ったのだ。私は暗い、北鉄道の近くにいた。雨が激しくなった。ゆっくりと、ひっきりなしに、目に見えない紐で結ばれているように自動車がやってきた。私は最初の車の運転手に合図をした。彼はおだやかに頭をふって断わった。自家用車かもしれない。ひょっとしたら満席なのかもしれない、と私は考えた。次の車のときは私は、プレートをうかがった。しかし湿った暗闇のなかでは、まったく判別がつかなかった。私が合図したひとたちはみんな一様に、おだやかに首を振って断わった。私は人間社会から追放されているような気がした。私の時代はどこに去ってしまったのか。良い馬車

があった古い時代は。その時代だったら、緑のプレートをつけた馬車が、どっちみち南の大通りにある車庫に帰る馬車が、私を連れていってくださるだろう。しかし今では私たちは進歩を呼び入れ、世界戦争をあおりたてた。私たち役者は。私たち、グズは。私たち、犠牲の動物を連れずによろめき踊る者たちは。そのとき、エンジンをとりつけた空の荷車が通りかかった。そのうえには、その昔、「ホールの強者たち」がかぶっていたような、つば広の、うなじがかくれるような帽子をかぶった男が乗っていた。その男が私を拾ってくれた。私はサンードニの門の下をくぐった。石の記念碑が王のしわとともに、私たちのゆっくりしたドライブにぴったりとくっついていて。数世紀来、野菜の列がパリの市へと向うあの明かるい長い通りにやってくると、その強い男は、頭で車を降りるように合図をした。それで私は、罪を悔いている酒飲みと、みすばらしい市の女たちの信心深い場所である聖オイスタッヒエの壁の下に立った。夜の光りのなかで、私は、ぼんやりとした金の縁をもった高い窓のみなれた暗い青色を感じた。私はまるで教会のなかにおいて、中からこの金色と青をかこんでいる窓の古い白色をみるようであった。私は当時よく立った場所に、カトリック信心会のピラが良き死について述べている場所にいるかのようなようだった。野菜をいっぱい積んだ自動車が、私をかすめて通りすぎた。人参をつんだ自動車が、漂よう庭園が、ねぎの山が、キャベツのさいころ型の山が通りすぎた。これとちがって、花キャベツは、小さな帽子とマントとともに、親しみ深く足もとに横たわり、芽と小さなバラとともに、芽キャベツがころがっていた。

それから最初の光が、壁を破風を縁どったとき、「処女」の泉をかこんだ小さな広場の木の葉が明るくなった。優美なレリーフの平べったい女性の身体が、石のなかでいくらか形をなし、暖かになった。しかしもう誰も私のためにベッドを整えてはくれない。戸口にいるひどく年寄りの女の眼は、虚空を通りすぎてゆくように、私を通りすぎてゆく。灰色の家々には、ベッドを作ってくれる胸はもうないし、奥の小部屋には、私たち凍えた先史時代の放浪者が北方の氷から彼らのところへ、暖かな原始の森の住人のところへ逃げこんだとき、私たちの慰さめであったあのひげのはえた雌猿の一匹もいない。その雌猿は、あの燃えるような冷たい奈落の底に誘惑するために身をゆだねるかにみえる少年のような美人たちよりも、青ざめた者に、ずっと良く、動物の暖かみを与えてくれた。それは私たちのために、母親の暖かみをもっていたのだが、今では、私たちのねじくれた趣味は、それに対して吐き気をもよおすのである。

未完

付記

ヘッセならぬヘッセルは日本ではまったくといってよいほど知られていない。ベン

ヤミンと共にプルーストを翻訳した人、ベンヤミンの『ベルリンの幼年時代』の「ティアガルニン」の章で『パリの農夫』をもじった「ベルリンの農夫」として紹介されている人物として、もっぱらベンヤミンとの関係において知られている著作家である。ここに翻訳した『ジャーナリズム入門』は、フランツ・ヘッセル（1880～1941）が1929年に発表した短編集の『後の祝い』のなかの一編である。ここでは全体の四分の一を翻訳している。『後の祝い』には、十七編の短篇が収められているが、そのなかでも、この『ジャーナリズム入門』は、最も長く、また重要性においても第1等の作品である。ここではシュルレマリズムにおいて展開されたフラヌール（遊歩者）の哲学が利用され、そのモチーフはベンヤミンにも引き継がれている。『パリの農夫』などと同じく、ヘッセルの文章も翻訳には難儀する。なお、ベンヤミンとヘッセルの関係については、拙稿、『W・ベンヤミンとF・ヘッセル』（長崎大学教養部紀要、人文科学篇、第27巻第1号）が扱っている。翻訳に使用したのは、1929年発行の Ernst Rowohlt版である。

1993年6月7日

